

第7号



2022年2月発行

コロナ禍で迎えた2022年、職員の皆さまはいかがお過ごしでしょうか？さて、2022年最初のGOOD CARE NURSEは「認知症看護」です。阪神圏域の高度急性期病院としての役割を担いつつ認知症を患う患者へ良質な医療、ケアが提供できるよう日々尽力されている認知症ケアチーム、足立認知症看護認定看護師を中心に「**当院の認知症ケア・看護**」についてお話を伺いました。

認知症ケアチームの活動紹介

Q. 代表的な活動として院内デイケアが挙げられると思います。現在はコロナ禍で中断していますが、普段はどのような活動をされていますか？

A. 各病棟で必ず何人かの患者さんがナースステーションに集まって見守られているという光景を見たことがあると思います。そのような患者さんを一手で見守ることで、病棟の看護が少しでもスムーズに進むようにと始めました。集団で輪投げや体操などのレクリエーション活動を行うことで、患者さんの精神状態にいい影響を与えることができます。一緒にいる人を思う・考えるなど他人に興味を持ったり、1対1では誘っても応じてくれない活動でも集団となると、「みんながやっているから自分もする」という行動につながってくれたりすることもあります。これによりせん妄を予防ができ、抑制時間を短くすることにつながります。



認知症ケアチームメンバー



Q. 印象に残っている事例を教えてください

A. ユニットに入室したAさんのことですが、脳梗塞とアルツハイマー型認知症のある患者さんで、易怒性があり、もともとであるのかせん妄によるものであるかということと一緒にアセスメントし、コミュニケーションも含むケア方法を考えました。伝えたこともすぐ忘れてしまうので、訪室毎に説明が必要であることや、持参の認知症薬は興奮作用があり現状には適さないこと、寝かせるだけじゃない薬剤の選択などを考え、主治医と相談し進めました。また術後せん妄の多い外科病棟からの依頼も増えており、むやみに抑制を続けず何を目的に解除するかということカンファレンスで話し合っています。その結果、看護記録には、患者の訴えを聞きその通りに接した、というような記述が増えており、認知症看護が少しずつ根づいていきているのではと感じます。

Q. 病棟看護師に伝えたいことは？

A. 看護師のコミュニケーションの取り方ひとつで、今夜せん妄になるかどうかが変わってきます。腰を落として患者さんと視線の高さを合わせ、訴えを傾聴しましょう。また、患者さんに対し友達言葉で接している看護師が時々います。認知症患者さんは、相手が何を言っているのかしっかり理解しています。自分の言葉かけひとつでせん妄を予防し抑制を最小限にすることができることを忘れないでほしいです。



次に認知症看護認定看護師の活動について足立さんにお話を伺いました。



足立さんは、現在認知症看護認定看護師として北9階に所属しています。主な活動は、院内デイケア（現在コロナ感染症対策のため中止中）、認知症ケアラウンド&カンファレンス（毎週金曜日）、リンクナース会、またラダー教育や看護学校の講師・院外の市民講座の講師なども行い、認知症患者さんのために尽力しています。



Q. どうして認知症看護認定看護師になろうと思ったのですか？

A. 認知症患者さんに対して接するとき、なんとなくの知識でコミュニケーションをとり、エビデンスに欠けるなど思っていました。祖父の入院をきっかけに高齢者看護に興味を持つようになり、そんな時、上司より認知症ケア認定看護師の勧めがあったことで、そのことについて自分で調べるようになりました。すると自分の母も認知症を患っているかもしれないということがわかり、より一層興味が湧いたことが、試験を受けようと思ったきっかけです。

Q. 認知症看護認定看護師になってよかったと思うことはどのようなことですか？

A. 経験値でしかなかったものが、勉強することで自信につながりました。認知症の種類の違いがわかるようになり、スタッフにもエビデンスを持ってアドバイスできるようになりました。また活動続けることで「不穏」や「認知が悪い」というようなマイナスなイメージの言葉を使うスタッフが減ったような気がします。認知症患者さんに対する院内のスタッフの考え方が少しずつ変わってきている実感はあります。

★認知症ケアラウンドの様子★



次回は3月頃に発行予定です。コメディックスで皆様からのご意見をお聞かせください。

「いいね！」情報もお待ちしています。
自薦、他薦は問いません！

発行元：看護部定着活動委員会

